

暉峻義等関係資料について

伊東, 林蔵 / ENOKI, Kazue / IT0, Rinzo / 榎, 一江

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / The journal of Ohara Institute for Social Research

(巻 / Volume)

692

(開始ページ / Start Page)

41

(終了ページ / End Page)

45

(発行年 / Year)

2016-06-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013185>

暉峻義等関係資料について

伊東 林蔵・榎 一江

はじめに

- 1 暉峻義等の研究
- 2 資料移転の経緯
- 3 蔵書の概要

おわりに

はじめに

法政大学大原社会問題研究所が引き受けた労働科学研究所旧蔵資料のうち、ここでは、暉峻義等関係資料 61 箱について、移管の経緯を記録するとともに、資料の概要を示して今後の研究の可能性を示すことにしたい。

当初、労働科学研究所関係者よりわれわれに打診されたのは「森戸文庫」の引き受けであった。労働科学研究所旧蔵の「森戸文庫」とは、戦後、労働科学研究所財団の理事長を務めた森戸辰男の晩年の蔵書をさす。森戸は、かつて大原社会問題研究所の研究員でもあったから、当然の打診ではあったが、現在の大原社会問題研究所に森戸文庫はなく、すでに森戸辰男の蔵書を所蔵し、精力的に研究を進めている広島大学への移管が妥当との結論に至った。幸い、広島大学の小池聖一氏にご連絡したところ、快くお引き受けいただくことができ、大原社会問題研究所としては労働科学研究所初代所長の暉峻義等に関する資料をお引き受けすることにした。以前調査に訪れた際に、暉峻に関する資料の存在を確認していたためである。そこで、まず、暉峻義等関係資料がもつ意義を明らかにすべく近年の研究に触れたうえで資料移管の経緯を述べ、一部蔵書の概要を記す。

1 暉峻義等の研究

まず、暉峻義等の略歴を確認しておこう。暉峻は、1889 年兵庫県に生まれ、1917 年東京帝国大学医学部を卒業し、生理学の研究に従事しつつ、1918 年には警視庁保健衛生事務嘱託となり、東京市内の貧民の健康状態調査などを行っていた。1919 年、大原社会問題研究所の創立に際して入所し、『日本社会衛生年鑑』の編集を担当していたが、1921 年倉敷労働科学研究所を創立し、所長

に就任した⁽¹⁾。

暉峻義等の父は、浄土真宗本願寺派の僧侶で仏教中学の校長であり、幼少のころから論語の素読など古い詰め込み教育を受けていた。その反動で、豊岡中学での寄宿舎生活や鹿児島での高校生活を通して、文学や思想に関心を抱いたという⁽²⁾。暉峻が医学を志して鹿児島の第七高等学校造士館に入学したのは、祖父の住んでいた鹿児島にホレ込んだからである⁽³⁾。同期 30 人の同級生のうち、20 人が東大へ 10 人が九大へと振り分けられる際も、医科に入れなければ経済学部でも文学部でも良いと無頓着であったが、級友の決定により東大医学部に行くことになったという⁽⁴⁾。こうして医学の道に進み、「労働科学」の創立者となった暉峻は様々な役職を歴任し、多くの著作を残した。その略歴および著作目録は、暉峻義等博士追憶出版刊行会編『暉峻義等博士と労働科学』（1967 年）にまとめられているが、近年、産業心理学や医学の分野以外で、再検討が進みつつある。

たとえば、裴富吉『労働科学の歴史——暉峻義等の学問と思想』（白桃書房、1997 年）は、労働科学の生成と展開を日本経営学史における経営労務論の一元流ととらえ、その創設者である暉峻義等に焦点を当てている。また、中山いづみ「大原社会問題研究所と労働科学の誕生」『大原社会問題研究所雑誌』（591、2008 年、4-9 頁）は、労働科学が女性の体の賃労働への適応が不十分であることを「科学的」に証明することで、女性労働者の低賃金や不安定雇用を正当化したという従来の批判に対し、「20 世紀前半の人間の労働をジェンダー的に理解するための基礎を築き、近代日本の社会・労働政策に大きな影響を与えた」と再評価する。社会政策史においても、杉田菜穂「日本における社会衛生学の展開——暉峻義等を中心に」『経済学雑誌』（113-1、2012 年、2-25 頁）は、「〈医学〉の視点から人口の〈質〉を議論し、それを社会衛生論から産業衛生論へと展開したともいえる暉峻の議論は、主に〈社会学〉系と結び付く生活の領域から主に〈経済〉系に結び付く労働の領域へと、1930 年代を通じてその関心の重点をシフトさせていく」（23 頁）とし、暉峻の社会衛生学に着目している。

このように、暉峻義等や労働科学は、すでに歴史研究の対象となっており、多様な角度から再評価が進められつつある。歴史的な分析を行う際に重要なのは資料の存在であり、労働科学研究所が有する暉峻義等関係資料は、極めて重要な資料といえよう。

2 資料移転の経緯

暉峻義等関係資料は、書庫の壁際に、「暉峻先生資料」と書かれた紙を貼った書架 2 台に収まっていた。ある時期に一定の整理がなされた痕跡はあるが、目録等も見当たらず、利用された形跡もない資料は、ただ保管されていたようである。2015 年 8 月 7 日、法政大学大原社会問題研究所の

(1) 暉峻義等博士追憶出版刊行会編『暉峻義等博士と労働科学』1967 年所収の略歴による。

(2) 三浦豊彦『暉峻義等——労働科学を創った男』リプロボート、1991 年、17 頁。

(3) 前掲『暉峻義等博士と労働科学』60 頁。ここでは、「祖父も父母もみなが鹿児島へ入れ、入るなら医学をやれという。私は医学に別段興味がなかったわけではない。ただ鹿児島という土地にホレ込んだ、その中に医科志願がふくまれたわけです。」と説明している。

(4) 前掲『暉峻義等博士と労働科学』64 頁。



写真1 「暉峻先生資料」の入った書架



写真2 「大日本産業報国会財団」備品マーク

研究員が参加して資料の搬出準備作業を行い、書架自体も受贈することにした。「大日本産業報国会」の備品マークがついたこの書架自体も貴重な資料と思われたからである。残念ながら、1台だけにせざるを得なかったが、現在、耐震補強を施し、大原社会問題研究所の応接室に配置している(写真1, 2)。

ところで、8月10日に22箱、9月29日に2箱および書架1台が大原社会問題研究所に到着して、資料の整理を開始しようとした矢先、労働科学研究所書庫の奥から別の暉峻義等関係資料が出てきたとの連絡を受けた。改めて労働科学研究所を訪問して確認すると、前回の移転の際に箱詰めされて運び込まれ、そのまま保管されていたもののようであった。通常、箱に記載された記述も重要な情報となるのだが、一部資料に関してはわれわれの便宜を考えて、すでに開封され、箱が処分されていたのは残念であった。棚に置かれていた資料には、暉峻の蔵書印である「心空書房義等蔵」ではなく、「石原文庫」の押印があるものも多く含まれていたが、暉峻の関係資料の一部とみなし、資料の搬出作業を行って、11月4日に37箱を受贈した⁽⁵⁾。

なお、これら資料は便宜的に、8月、9月に到着した資料を暉峻義等関係資料①、11月に到着した追加分を暉峻義等関係資料②として、分けて整理している(次頁写真3)。暉峻義等関係資料①には、医学書などドイツ語の文献が多かったため、資料整理のアルバイトとしてドイツ史を専攻す

(5) 講演録「女工と結核」で知られる石原修(1885-1947)の蔵書は、暉峻義等との親交があったことなどから労研図書館に収蔵され、「石原文庫」となっていた。和文217冊、欧文214冊の図書のほか、別刷り2,787冊があり、朱印の「石原文庫」印は労働科学研究所で作成して押捺したものという。この一部が暉峻義等関係資料と一緒に紛れ込んだと思われる。石原文庫については、小沼十穂「労働科学研究所収蔵の石原(修)文庫について」『労働科学』65-3, 1989年, 197-202頁に詳しい。



写真3 整理中の様子

る東京大学大学院経済学研究科博士課程の伊東林蔵さんに来ていただき、整理を進めた。現在、暉峻義等関係資料①に関しては、暉峻の原稿や論文の別刷などを含む資料（7箱）をのぞく蔵書の仮整理を終えた段階であり、以下はその概要である。

3 蔵書の概要

暉峻義等の蔵書は、日本における労働科学の父といわれる彼の広範で旺盛な研究意欲を今に伝えるものであり、専門とした医学・生理学、労働科学に留まらない幅広い分野の文献が含まれている。結核、肺炎、梅毒などの彼が生きた時代の深刻な病についての研究書をはじめ、解剖学、精神医学、遺伝学などの医学書と並び、労働問題、衛生問題、栄養問題、人口問題、青少年問題、婦人問題などの多様な問題を扱った社会科学的な研究書やルポルタージュが収められている。具体的な地域の医療・衛生制度の調査・研究や社会生理学、民族衛生学、医学史を扱った文献から見えてくるものは、暉峻が医療・衛生を自然科学的な見地からだけでなく、社会・歴史の文脈に位置づけ、社会実践的な見地から捉えていたということである。

蔵書の構成は主に19世紀から第二次世界大戦までに出版されたものであり、わずかながら、18世紀以前と戦後の文献も含んでおり、当時の医療・衛生の実態やそれに対する認識を知る重要な史料となる。例えば、蔵書の中で大きな比重を占めるドイツ語文献のうち、戦前に出版された文献の中には、Rassenhygiene（人種衛生学）、Volkshygiene（民族衛生学）、Eugenik（優生学）という時代特有のテーマを扱ったものが多く、暉峻が大日本産業報国会や大政翼賛会の主導的地位にあった人物であることを鑑みれば、日本におけるナチズムやナチズム以前の優生学的思想受容のあり方を示す貴重な史料となると考えられる。

また世界各地の医療・衛生事情を扱った文献もあり、ソ連の衛生教育事情からチェコスロヴァキア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナなどの欧州の小国の他、満州、ペルシア（イラン）、日本などアジア諸国の衛生実態についての文献も多く、アボリジニーやジャマイカ人、ユカタン半島のネイティヴ・アメリカンの代謝について扱った文献までも所蔵している。在米中国人の少女の代謝についての研究書は、暉峻の蔵書の中にあつては人種衛生学的な文脈で捉えていたという推測を拭えない。

暉峻が所蔵していた和書には、洋書とは異なり、農業、食糧といったテーマが多く、仏教と医学、インドの神話のように宗教・文化と医学の関係を扱った人文科学系の書物が含まれている。とはいえ、医学教育、家計消費、貧困、保健師といった当時の日本社会が面と向かわざるを得なかったアクチュアルな問題を扱った文献が主である。他にも三菱長崎造船所の神経衰弱や炭坑夫の眼球震盪についてなど個別具体的な労働問題の研究書も所蔵している。

おわりに

本稿は、労働科学研究所旧蔵の暉峻義等関係資料の移管の経緯と資料の概要を述べてきた。残念ながら、その全貌はまだ見えておらず、一般に公開できる状況にないことは断っておかなければならない。

実際のところ、すでに多くの分析がなされている暉峻義等に関して、今回の資料がなにがしかの新しい知見をもたらす保証はない。しかしながら、これまでの分析が、暉峻義等の著作そのものを読み込み、分析してきたのに対して、その作品の基礎となった蔵書や原稿の分析を行うことは学術的に重要な作業となるであろう。とりわけ、暉峻が重要な役割を果たした戦時期の労働と生活をめぐる政策に関する再検討は進められるべき課題である。また、暉峻の蔵書は当時の医師が得たドイツを中心とする西洋の研究成果を知る手掛かりともなり、医療・衛生に関する日独関係史的な分析も可能となるだろう。引き続き、資料の整理を行い、研究利用が可能となるよう公開準備を進めたい。

（いとう・りんぞう 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）

（えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所教授）

*本稿の執筆に当たっては、「3 蔵書の概要」を伊東林蔵が、その他を榎一江が担当した。

*本研究は、JSPS 科研費 24530407（「戦時期の労働と生活に関する基礎的研究」）の助成を受けたものである。